

となった。これまで、松果体部の germinoma には、 ^{201}Tl SPECT で集積を認めなかった報告が多い。本例は、下垂体茎の germinoma の治療経過を観察する上で ^{201}Tl SPECT が有用であることを示した。

38. 稀な気管支性嚢胞由来癌の肺 ^{201}Tl -SPECT

土井 健司 難波隆一郎 小倉 康晴
田淵耕次郎 中田 和伸 松井 律夫
清水 雅史 末吉 公三 植林 勇

(大阪医大・放)

今回われわれは、気管支性嚢胞より未分化癌が発生した症例を経験した。肺 ^{201}Tl -SPECT は、悪性化した部分の判定に有用であったため若干の文献的考察を加えて報告した。

症例は 52 歳男性。現病歴は、24 歳より検診にて、前縦隔に腫瘤を認めていたが、症状がないため放置していた。平成 6 年 7 月より腰部痛を自覚し、近医にて第三腰椎に転移性と思われる骨腫瘍を認められた。平成 6 年 8 月 2 日、腰部への放射線治療および原発巣の検索のため、当科入院となった。胸部 XP にて、前縦隔に一塊となって直径 10 cm と 5 cm の 2 つの嚢胞を認めた。壁の一部に石灰化を認め、当初は奇形腫の悪性転化と考えていた。胸部造影 CT では、腫瘍壁の一部が肥厚しており、ここからの癌の発生を疑ったが、気管支鏡、CT 下生検を行っても、悪性細胞は検出されなかった。肺 ^{201}Tl -SPECT にて腫瘍の嚢胞部は欠損像として認められた。壁肥厚部は early ratio=2.0, delay ratio=2.93, retention index=28.3 と高度な集積を示した。当科における肺縦隔腫瘍 88 例の集計によると、悪性腫瘍の retention index は 27.52 ± 31.58 、良性腫瘍では -13.67 ± 8.15 であり、同部位には悪性細胞が存在すると考えられた。その後、病理解剖が行われた。奇形腫と考えられていた嚢胞は、気管支腺、二列絨毛上皮、平滑筋組織を持ち、気管支性嚢胞と診断された。癌細胞は一部に扁平上皮化と、腺構造を認めたが、大部分が未分化な細胞で占められ、肺の大細胞癌の性格に似た、未分化癌と診断された。癌細胞の広がり、肺 ^{201}Tl -SPECT の集積部とよく一致しており、病変の範囲を決定するのに ^{201}Tl -SPECT は有用であると考えられた。

39. 術前後で ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラム所見を検討し得た褐色細胞腫の 1 例

松本 雄賀 伊藤 一貴 寺田 幸治
谷口 洋子 大槻 克一 中田 徹男
中川 雅夫 (京府医大・二内)
杉原 洋樹 牛嶋 陽 前田 知穂
(同・放)

[はじめに] ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラムは各種心疾患の診断、病態把握に有用とされるが、異常所見の発現機序については不明な点も多い。一方、褐色細胞腫では ^{131}I -MIBG の心筋集積が低下するとされ、血中カテコラミン値との関連も報告されている。 ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラムが異常所見を呈し、それが摘出術後に改善した褐色細胞腫の一例を経験した。[症例] 56 歳、男性。動悸発作、発汗過多、手指振戦の増悪にて当科を受診。発作性の血圧上昇および血中カテコラミンの高値、および腹部 CT 検査における右副腎の腫瘤陰影より褐色細胞腫が疑われ入院。血中 epinephrine は 0.53 ng/ml, norepinephrine は 0.81 ng/ml と高値で立位負荷後には有意な上昇を示した。 ^{123}I -MIBG シンチグラムの 24 時間後背面像では右副腎部に相当する部位に MIBG の異常集積を認めた。心電図、心臓超音波、 ^{201}Tl 心筋シンチグラム等の諸検査上異常所見を認めず、心機能異常、心肥大、心筋虚血は存在しないと考えられた。しかし、術前の ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラムでは、下後壁の集積低下、心筋/縦隔比の低下、クリアランスの亢進という異常所見が認められた。さらに、これらの異常所見は腫瘍摘出術後早期に改善した。[考察] 本症例における術前の ^{123}I -MIBG の心臓動態の異常は、心筋障害の反映としての心臓交感神経機能異常ではなく、血中カテコラミンの高値と関連する現象と推定された。各種心疾患における ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラムの異常所見の発現機序は不明な点が多いが、本症例の摘出術前後の ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラム所見は、 ^{123}I -MIBG の心臓における動態を解釈する上で貴重と考えられた。